

畏友西川長夫教授の御定年を祝って

我が畏敬する友西川長夫さんの定年の報を聞いて感無量である。西川さんと私はここ30年間文字どおり青春を共にしてきた。

最初に彼の名前を知ったのは大学紛争の頃であった。当時われわれは荒れる学園で体をはって頑張っていた。下手をすると急進派学生の言うとおりの大学は解体してしまうのではないかと、そうしてはならじと、必死になっていた。そういった騒ぎのなかで当時かなり影響力のある総合雑誌「展望」にフランス留学中の仏文学者がカルチェラタンの学生反乱についてレポートを執筆した。そのレポートそのものは良質なものであったが、日本で苦勞しているわれわれにとって、そのレポートはあまりにも評論家的に見え、許しがたいものと写った。しかも、その執筆者が立命館の専任教員であることを知ってわれわれは文字どおり怒り心頭に発し、帰ってきたらただではすませないぞと息巻いた。その仏文学者こそが若き日の西川長夫であった。

その後どういう経緯があったかよくは記憶していないが、気が付いたらすっかり仲良くなっており、週に2、3度は5～6人の文学部の仲間と一緒にフランス料理の食べ歩きを楽しんでいた。立命館育ちの私にとって他大学から来た西川さん達は、新鮮であった。なかでも西川さんは特に優秀であった。じっくりと粘り強く、自分の頭で考えるタイプであった。恐らく京大の良い意味での伝統に連なる人であろう。

かれの出世作であるボナパルティズム論も、私の好きな『国境の越え方』（筑摩書房）も、文学専攻特有の徹底したテキストの読み込みの成果であった。その学問的方法論には啓発されること大であった。西川さんの業績についてここでふれる紙数は与えられてはいないが、スタンダリアンとして出発し、次第に文化や歴史の領域に踏み込んでいき、次々に大胆な問題提起と論争を繰り返す、文化と歴史、そして文学の3つの領域をまたぐ真の意味でのインターディシプリナリーなわが国を代表する研究者になった。

その間、親しい友人として絶えず様々議論してきたが、あれだけの大量の

執筆活動にもかかわらず，仕事を理由に付き合いを避けることは一度もなかった。心優しい友人であった。これだけの学者を立命館が正当に遇し得たか否か，心もとないところであるが，学生にとっても西川さんの存在が大きな刺激であったことは疑いのない事実である。願わくば立命館が西川さんの学問的成長にとって刺激的場所でありえたことを。そして今後もそうであり続けることを。長い間，有り難う。

2000年3月

立命館大学
総長

長 田 豊 臣